

# 博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第93号

2011

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成24年3月21日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条1項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	柳 沼 正 広（東京都）
学位の種類	博士（人文学）
学位記番号	甲 第 9 3 号
学位授与の日付	平成 2 4 年 3 月 2 1 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 創価大学大学院学則第 1 7 条第 2 項 創価大学学位規則第 3 条の 3 第 1 項該当
論文題目	エラスムスとルネサンス・ヒューマニズム — 宗教改革前夜の異教文学 —
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 石神 豊 文学研究科教授 委員 宮田 幸一 文学研究科教授 委員 根占 献一 学習院女子大学教授

2012年1月5日

## 博士論文審査および最終試験報告書（課程博士）

主査 石神 豊 本学文学研究科教授  
委員 宮田幸一 本学文学研究科教授  
委員 根占献一 学習院女子大学教授

### 博士(人文学)学位請求論文提出者

氏名 柳沼正広（やぎぬまさひろ）（男）

生年月日 1972年11月6日（満38歳）

### 論文題目

「エラスムスとルネサンス・ヒューマニズム—宗教改革前夜の異教文学」

### 1 内容の要旨

本論文は、本論として第1章から第5章までからなり、序論および結論を付している。さらに付録としてエラスムスの著作および書簡からの翻訳に解題を付したものを3篇加えた構成となっている。論文全体として、400字原稿用紙換算でおよそ750枚ほどである。

本研究の目的は、ルネサンス期の人文学者でありカトリックの司祭でもあったエラスムス（1466-1536）が、キリスト教以前の西欧世界の学問、文学にどのような位置づけを与えようとしていたかを、主として初期の作品を中心に考察することにある。その際この課題を、作品成立の背景や経緯も重視しつつ、とくに書簡を含むラテン語原典に即して綿密に跡付けることに力点を置いたことが本論文の特徴となっている。

本論文の目次（細目を省く）は次のようである。

序論

第1章 若きエラスムスとルネサンス・ヒューマニズム

第2章 エラスムスの古典研究擁護におけるヒエロニムスとアウグスティヌス  
—『反蛮族論』*Antibarbarorum liber*から

第3章 異教古典の遺産 知恵と雄弁

第4章 エラスムスの聖職者批判

—1515年『格言集』「アルキビアデスのシレノス」より

## 第5章 エラスムス対ドルピウス論争—ヒューマニストと神学者

### 結論

付録① 翻訳と解題 エラスムス『格言集』から—「ヘラクレスの難行」

付録② 翻訳と解題 エラスムス『格言集』から—「ゆっくり急げ」

付録③ 翻訳と解題 エラスムス「セルウァティウス・ロゲルス宛書簡」(1517年7月)

### 略年表

### 参考文献

概要は以下のとおりである。

序論において、まず欧米そして日本におけるエラスムス研究史を概観し、つづいて国内におけるヒューマニズムに関する代表的な研究者として渡辺一夫と金子晴勇の説を検討する。そしてクリステラーの解釈にもとづいて、本研究におけるルネサンス・ヒューマニズムの定義を示し、本研究に直接かかわる代表的な先行研究を紹介する。序論の最後に、本研究の概要を示すとともに、論点として①エラスムスが伝統的な考え方をいかに受け継いだか、また独自性がどこにあるかという点、②異教文学とキリスト教信仰との調和の問題、③エラスムスの経歴をたどることで考え方の推移をみること、の三点を示している。

第1章は、冒頭に、『反蛮族論』における若きエラスムス自身の回想をとりあげ、筆者の関心の起点を示している。本章では、エラスムスの出自、デフェンテルでの教育、ステイン修道院時代における異教文学と交友関係、そして修道院の中で書いた『世の蔑視について』の検討を通し、エラスムスにおけるルネサンス・ヒューマニズムとの出会いを中心に見ていく。とりわけ修道院時代におけるコルネリウス・ヘラルトとの交友に注目し、詩や書簡の文通を詳細に検討することで、次第にエラスムスが宗教的関心を強めていった経緯が知られると同時に、早くから古典作家のみならずイタリアのヒューマニストの作品にも親しんでいたことが明らかとなる。

第2章では、初期の『反蛮族論』におけるヒエロニムスとアウグスティヌスの引用を通して、エラスムスがいかに異教古典に対する自己の態度を定めていったかについて検討する。木の脇悦郎、畑宏枝両氏の先行研究にも負いつつ、いまだ十分には研究されていない両ラテン教父の当該問題に関する分析を通して『反蛮族論』の性格を見定めようとする。この段階におけるアウグスティヌスの『キリスト教の教え』は、エラスムスにとって聖書解釈上の重要性よりも、異教学問擁護としての重要性が高かったとみられる。

第3章では、エラスムスにとって「知恵と雄弁」が結びついたものとみられた「ことわざ」こそ、まさに異教から何を学ぶべきかを教えてくれるものであったということを述べる。1500年に発刊した『格言集』初版の序文では、ことわざに秘められた知恵が、異教世界とキリスト教世界の境界を超えて用いられるべきものということが述べられている。また、『格言集』第3版の序論の、ことわざは古代にあっても「人間から生み出されたのではなく、天に由来すると考えられていた」との表現に注目し、エラスムスにおいても1508年

からは聖書におけることわざと異教徒に伝わることわざとの共通性を強調する背後には、同様な考えがあったことを指摘する。

第4章では、『格言集』第4版の「アルキビアデスのシレノス」をとりあげ、エラスムスの聖職者批判の意図について検討する。エラスムスは1511年の『痴愚神礼讃』において聖職者への批判を繰り広げたが、この『格言集』における「アルキビアデスのシレノス」の解説において、聖職者の現状と使徒的理想の乖離について論じており、その間に異教哲学者たちをもち出していることが注目される。ここに異教古代の遺産はすべてキリスト自身によって用意されたものとする考え方が示されていると本章は述べる。『格言集』第4版の刊行後に、ルターによる宗教改革が生起し、エラスムスも渦中に巻き込まれていくことを考えると、この時点でのエラスムスの立場を知ることはきわめて重要といえる。

第5章では、1515年に友人の神学者ドルピウスに送った書簡をとり上げる。前年にドルピウスがエラスムスに対して送った書簡には『痴愚神礼讃』出版とギリシア語原典の聖書の刊行についての批判が含まれていた。とりわけ、後者の批判へのエラスムスの応答を見ることで、言語学的方法によって権威に立ち向かおうとするヒューマニスト・エラスムスの真面目が知られる。

結論において、本研究をイーデン、ボイル、グラフトンとジャーディン、トレイシーらの研究との関連で位置づけるとともに、エラスムスが一貫して異教文学に価値を認め擁護の姿勢を貫いていたということ述べる。

なお、付録3篇のうち、①と②は主に第3章の記述を補うものとして、また③はエラスムス自身が自らの生涯を振り返り、またその後の展望をも述べている点で彼の到達した位置をよく示すものとして付加された。いずれも本論文筆者によるラテン語からの翻訳に解題をつけたものである。

## 2 審査結果の要旨

第1章では、エラスムスとコルネリスの交流に関する分析において、互いの心の襞にまで分け入ろうとする探究が目玉を引く。第2章は、本論文筆者の問題意識が最も鮮明に出ているといえる点、重要であり、とくにヒエロニムスとアウグスティヌスの理解に挑戦した点は、今後のさらなる究明の深まりを期待しうるものである。第3章、第4章ではエラスムスの『格言集』から、本論文のテーマに関する表現を剔出した点は一背景への論及も含め—エラスムス研究における一つのアプローチの仕方を示しているともいえ、今後の研究に資するものと考えられる。第5章は、エラスムスの立場を、ある程度ではあるが明示している点において、本論文の最終章としてふさわしいものである。序論および結論部において、内外のエラスムス文献に広く視野を及ぼそうと努力した点は評価できる。

論文全般に言えることであるが、本論文のスタイルが、当該問題に対しなるべく原典の表現をして〈語らしめる〉というものであることから、客観性を確保する点では一定の成

果をみせ、評価できる。ただ、その反面、問題自体の展開や筆者の立場の表明がやや抑えられているといえ、ときに論究不足の個所が見受けられるのは気になるところである。後者は、思想史研究においては、やはり避けられない課題である。今後さらに海外の研究に通じていくとともに、研究成果を積極的に内外に発表していくことが望まれる。

本論文についての公開発表会は 2011 年 12 月 14 日に学内会議室において行われ、同日、引き続き口頭試問の形で最終試験を行った。口頭試問は 3 人の審査委員と本論文筆者の間で質疑応答を行い、その後審査委員による判断を合議決定した。なお、審査委員のうち学外から加わった根占献一教授は、ルネサンス思想史を専門とする研究者である。

質疑の一部は次のようなものであった。

「異教文学という表現について妥当か否か。また、エラスムス自身が古典に対しどの程度＜異教＞意識をもっていたのか」。「ヒューマニズムの概念について、一般に古典研究だけに限定する場合、抜け落ちるものがある。とくにフマニタスの概念について、フィラントローピアの性格が失われるのではないか」。「＜ヒエロニムスの夢＞はかなり強い排他的な性格をもっている。これについてのエラスムスの扱いはかなり軽いが、このエラスムスの態度をどう見るべきか」。「マンスフィールドがいわゆる＜解放の神学＞との関連で述べている個所があるが、これをどう理解するか」。「アウグスティヌスとヒエロニムスに対するエラスムスの態度の違いについて」等。

これらの質疑に対して、本論文筆者はそれぞれ適切な応答をした。研究上、見落としした点や追究不足の事柄に関しては、今後の研究をさらに進めたい旨を述べた。応答については、おおむね満足しうるものであった。

本論文は、エラスムスのラテン語原典を丹念に読み解き、その基礎作業の上に成り立っている。邦訳文献が未だ少なく、国内での研究書も多くはないエラスムス研究を鑑みると、本論文の労作は高く評価しうるとともに、今後の国内でのエラスムス研究の進展に資するものといえよう。学位請求論文としても相当な内容とレベルを備えたものといえる。

よって、本提出論文は、博士(人文学)を授与するにふさわしい内容をもつものであると判断する。

以上